目覚めれば弥陀の懐

「小児科医が語る親鸞の教え」

駒澤 勝

医者がみた いのちの意味と親鸞の教え

幼くして命を失う子どもや、不治の病と共に生きる幼な子を目の当たりにして
医療と科学の限界を感じた著者が「生きる意味」を親鸞の教えから説き明かす。

仏教の風400年

法藏館／定価：本体1,800円（税別）

仏教・真宗

しかし、あるとき特別の思いを込めていた受け持ち患者がついに亡くなったのをきっかけに、科学や医学の限界を強く感じ、科学や医療には根本的な何かが欠けているように思えてきた。その欠けたものが何かは全くわからなかったが、それは科学、医学の対極にあると思っていた念仏の世界にあるように思えてきた。

そう言えば医学は毎年、何百もの学会を開き、何万もの研究成果を発表して、わずか数年前に立てられた新説を次々に新しいものに置き換えている。今発表される新説も数年後には捨てられたり、打ち崩される運命にある。それに引き換え、仏教が説かれて二千五百年、親鸞が生まれて八百年、教えは少しも動じていないではないか。

この気持ちは、一気に私を宗教に引きつけた。私は『歎異抄』など何冊かの親鸞の書物を読み始めた。しかし解説書を頼りに読んでも、いずれも非常に難解でとても心の支えにはならなかった。それで、どうせいずれも難解なら、いっそのことそれまで避けていた『教行信證』に挑戦しようと考えた。

そこで星野元豊氏の『講解教行信證　教行の巻』に巡り合うことができた。今から三十二年前、三十五歳のときである。以来、新しい巻が発行されるたびに買い求めて、『講解教行信證』全六巻（法藏館、一九七七～八三年、改訂版一九九四～九五年）を寸暇を惜しんで読み続けた。同氏の『浄土の哲学』（同、一九七五年）と『浄土』（同、一九五七年）も手に入

はしがき

私は広島県の山奥で育った。浄土真宗が盛んな地域柄、親鸞の教えに生きようとする人は多かった。私の両親も、わが子二人を戦争や病気で失ったせいもあって熱心に念仏を称えていた。そして私たち兄弟に念仏の重要性を執拗なほどに話し、事あるごとに念仏を催促していた。

しかし、兄姉同様私自身も、成長とともに次第に念仏や宗教の意味に疑問を感じるようになり、無視したり反発したりしていた。非合理に思え、雲をつかむような念仏の話よりも、いわゆる科学的思考のほうがはるかによく納得でき、頼もしく思えた。やがて大学に進み、小児科医になり、病院で病気の子どもを診療するようになると、それなりの充実感もあり、念仏からは遠ざかるばかりだった。

一方、いつの頃からか医学や科学に疑問を抱く場面に遭遇することもあった。それでもそれは自分の努力が足りないためだとか、今後の進歩で解決されるだろうなどと自分に言い聞かせて、どこまでも科学にすがろうとしていた。

今は、一方で「もし星野元豊氏に読んでいただけたらひどく叱責されるかも知れない」という不安もありながら、他方で「これで大筋正解のはずだ」という、うぬぼれもある。まだまだ書きつくせぬこと、うまく書き表せなかったことなどが多くあることは充分承知しているが、私の力はここまでである。

私が述べたことが正しければ星野元豊氏の著書に負うところが大である。間違いがあればまぎれもなく私の読み違えである。星野元豊氏の著書で確認していただきたい。そのようなわけで本書の引用の多くは星野元豊氏の著書からである。とくに『教行信證』はすべて『講解教行信證』の各巻の示したページから引用したものである。そしてその読み方はできるだけ同書にしたがった。また、同書の講解部分である解釈や検討から引用した文章は、(『講解教行信證』〇〇頁)として示した。それ以外の引用は原則として『浄土真宗聖典　註釈版』(本願寺出版部、一九八八年)によった。

ただ私がどんなに読み違えていようと、間違っていようと、そんな私が阿弥陀仏に抱かれ続けていることだけは間違いないと高をくくっている。

この本が、どこかの誰かが星野元豊氏の著書を熟読してくださることにつながったり、浄土真宗に目を向けてくださったり、あるいは親鸞の教えを理解するのに、いささかでもお役に立てば望外の幸せである。

れた。しかし、いずれも難解至極で全く歯が立たず、遅々として進まない。何度も投げ出そうとした。そのたびに「もしや宝物を捨てるのでは」と思い直しては、また読み続けた。

そうこうしていた三十九歳のとき、ハッとわかるようになった。それまで無味乾燥だったのが、みずみずしく潤いに満ちて迫ってくるようになった。そして繰り返し読むたびに新しい発見があり、「そうだ、そうだ」と膝を叩き、そのページに付箋を付けている。今ではほとんどのページに付箋が付いて、付箋の意味がなくなってしまった。ほかの仏教書はほとんど読まない。ほかの人の講演や説教もほとんど聞かない。上記の八冊だけを、何回も何回も繰り返して読んでいる。

十年ばかり前から、わかったことをまとめてみたいと思うようになった。今は亡き星野元豊氏から「浄土真宗について述べよ」という試験問題をいただいて、それに対する答案を書くようなつもりで書こうと思った。以来、挑戦はしてみるものの、うまく整理ができない。書きたいことはいくらでもあるのに、みな羅列的になって、体系づけができない。構成を何回も変えてみた。そのたびに別の壁にぶち当たり幾度となく筆を折った。それでも思い直しては、診療の合間を見つけて細々と作業を続けてきた。最近とみに記憶力がおぼつかなくなり、いささか焦りを感じていた。時が経ち、ここに至ってどうにか形ができてきた。

はしがき　i

一章　何のために生きるのか……3

二章　生きている、輪廻転生するとはどういうことか……11

一、生命体　12
二、誕生、死、生きる　14
三、統合主体　16
四、統合主体は生命体の主体　17
五、生物学的に死んでも、統合主体はなくならない　18
六、魂とは統合主体？　20
七、唯識説と統合主体　21
八、輪廻転生　22

目覚めれば　弥陀の懐

――小児科医が語る親鸞の教え――

目次

9　涅槃は生きている　47
10　涅槃は仏　49
11　涅槃は彼岸の世界　50

二、阿弥陀仏　52

1　法性法身の大転換　54
2　法性法身即方便法身　58
3　法性法身の大転換の筋道　60
4　三誓偈の第一の誓い　62
5　三誓偈の第二の誓い　64
6　三誓偈の第三の誓い　66
7　第三の誓いの成立の論理　67
8　法蔵の決意　70
9　如来　71
10　まとめ　72

三章　誤解している『葉っぱのフレディ』……26
一、あらすじ　27
二、フレディの間違い　28
三、私と阿弥陀仏の関係　30
四、阿頼耶識　32
四章　阿弥陀仏とは何か……35
一、現実世界と涅槃　36
1　世間智、差別智、無差別智　36
2　世間智　36
3　差別智　38
4　無差別智　41
5　無差別智は仏智　43
6　一切は空である　44
7　色即是空、空即是色　45
8　涅槃、一如、真如　46

六章　信を得る……105
一、親鸞から学んだこと　105
二、浄土真宗の信　107
三、三　忍　110
四、念　仏　113
五、口称念仏の南無阿弥陀仏　115
六、死んだら仏様になる　117
七、小我と大我・真我　119
八、即得往生　120
九、極　楽　123
十、横超断四流　125
十一、罪の消滅　130
十二、信を得ても苦悩は続く　141
十三、信も差別智、煩悩の働き　144

五章　迷っている衆生……77
一、往生浄土　77
二、現実は南無阿弥陀仏　78
三、迷いの根源は阿頼耶識　81
四、安らぎへの道　82
五、無明、迷い　85
六、全身全霊の迷い　86
七、わが身可愛さ　88
八、煩悩の出現　90
九、人生は苦なり　92
十、人の営みと迷い　94
十一、思いやりも心の狭さ　97
十二、根幹を踏み外した問題解決の努力　100

四、阿弥陀仏の私に対する働き　202
五、現実世界における阿弥陀仏の働き　206
九章　人生は信を得るためにある　214
一、いざ去なん、魔郷にはとどまるべからず　214
二、医療は念仏の助業なり　217
三、人に生まれたのは絶好の機会　218
参考文献　222
あとがき　223

七章　現生正定聚
——煩悩熾盛の身のまま救われていく……149
一、機の深信　150
二、阿弥陀仏の救い　153
三、宗教的喜び　159
四、現実の私　163
五、無明と光　173
六、一声の念仏で救われる　176
七、往生浄土とは現生正定聚　179
八、還相廻向　183
八章　信は他力……192
一、信は自己否定　193
二、他者からの働きかけ　196
三、信は阿弥陀仏の為すこと　200

あとがき

十年来の作業にやっと目途がついた。拙いものだが、これでも私には身に余るほどの重荷だった。考えてみると、本を書くなど身の程知らずの無謀な挑戦だったのかも知れない。取り掛かってあっという間に十年が過ぎてしまった。それでも何とかここまで辿り着いた。

作業が完成に近づくにしたがって、でき上がった本を今は亡き母に見せることができたらどんなに喜んでくれるだろうと何回も思った。私は小児科医として多くの難病の子どもたちに関わってきた。ハッピーエンドの患者さんも数多くあったが、努力の甲斐なく悲惨で、残酷な結果に終わる場面にも幾度となく遭遇した。あどけない子どもたちの理不尽な現実をどう受け止めてよいか途方に暮れた。そんなとき、親鸞の教えを求めようとしたのは、何よりも母の影響だったと思う。

そこで、何冊かの親鸞の書物に接した後、たまたま星野元豊氏の著書に出会うことができた。しかし、それも最初は手も足も出ない代物だった。何度も放りだそうかと思った。その度にすでに亡くなった子どもや、今難病に喘いでいる子どもたちが、「宝物を捨てるな」

参考文献

星野元豊『講解教行信證　教行の巻』（法藏館、昭和五十二年）
同『講解教行信證　信の巻』（法藏館、昭和五十三年）
同『講解教行信證　信（続）証の巻』（法藏館、昭和五十四年）
同『講解教行信證　真仏土の巻』（法藏館、昭和五十六年）
同『浄土の哲学　続『浄土』』（法藏館、昭和五十四年）
真宗聖典編纂委員会『浄土真宗聖典　註釈版』（本願寺出版部、昭和六十三年）
結城令聞監修『現代語訳　親鸞全集　第二集　書簡』（講談社、昭和四十九年）
濱口惠璋編纂『昭和改訂　真宗聖典』（興教書院、昭和三年）

書はすべて法藏館から出版されている。それで執筆を始めた頃から、この本を法藏館から出版してもらうのが夢だった。そんな訳で無理を承知で強引にお願いした。ありがたいことに受け入れてもらうことができた。結果、編集部の方々、とりわけ田中夕子氏には、多大なご負担をかけることになった。面倒な編集作業を粘り強く続けて、稚拙な原稿を一冊の本にまとめ上げて頂くことができた。並々ならぬご尽力に心から感謝申し上げる。

平成二十二年春

著　者

と叱咤激励してくれているように思えた。そしてまたしても重い腰を上げて読み直す。それの繰り返しだった。

諦めなくてよかった。数年後、はっとわかるようになった。答えが見えてきた。念仏の道が開けてきた。当地は片田舎で聞法の機会も縁遠く、仏法を語る相手はほとんどいない。でも氏の著書はいつも傍らで私を導いてくれる。親鸞の声がかすかに聞こえるような気がする。氏の著書に出会わなかったら到底ここまで来ることができなかったに違いない。

振り返ってみるに、親鸞の教えに巡り合えた私の人生は、誰の人生にもまして幸運であったと思う。私のまわりのすべてが私を念仏に導く諸仏で、不要なものは何一つなかったはずであることは、よくわかっている。しかし、私の母と私が関わった患者さんたち、それに何よりも星野元豊氏の著書には、とりわけ大きな恩を感じている。その恩に報いるためにも解ったことをどうしても本にまとめたいという思いがあった。

その思いを叶える作業もやっと一段落した今は、「さてこの本が世に出て、一体どう受け止められるだろうか」と期待と不安が入り混じった複雑な気持ちである。読者の皆様の率直な感想など聞かせていただければどんなに嬉しいことだろう。正直なところ、厚かましくも心待ちにしている。

最後になったが、法藏館の方々にお礼を述べなければならない。私の読んだ星野氏の著

健康であれば幸せか　親鸞さまと私	駒澤　勝著	三八一円
親鸞再考　なぜ悪人こそ救われるのか	佐々木正著	一、八〇〇円
現代親鸞入門　真宗学シリーズ1	信楽峻麿著	一、九〇〇円
何のために人間に生まれたのか	長久寺徳瑞著	一、五〇〇円
いのちを生きる　法然上人と親鸞聖人のみ教え	浅井成海著	一、九〇〇円
転依　迷いより目覚めへ	菅原信隆著	三、六〇〇円
荒野の白道　真実の浄土を求めて	平野　修著	一、五〇〇円
あなたよし　わたしよし　みんなよし	佐々木徹悟著	一、五〇〇円
親鸞の念仏	岡　亮二著	五、七〇〇円
講解　教行信証　全四巻・補遺篇	星野元豊著　一巻	九、〇〇〇円
	二～四巻	一一、〇〇〇円
	補遺篇	四、〇〇〇円

価格税別

法藏館

駒澤　勝（こまざわ　まさる）

昭和17年　広島県三次市に生まれる
昭和43年　岡山大学医学部卒業
昭和44年　国立岡山病院小児科勤務
昭和48年～49年　科学技術庁長期在外研究員としてアメリカ・ニューヨーク州立大学小児科に留学
昭和55年　国立岡山病院小児医療センター医長
平成３年　こまざわ小児科開院、院長

著　書　『病気の子どもも日本一』（山陽新聞社、平成２年）
『健康であれば幸せか』（法藏館、平成12年）

住　所　〒705-0001　岡山県備前市伊部400－8

目覚めれば　弥陀の懐
――小児科医が語る親鸞の教え――

二〇一〇年六月二〇日　初版第一刷発行

著　者　駒澤　勝
発行者　西村明高
発行所　株式会社　法藏館
京都市下京区正面通烏丸東入
郵便番号　六〇〇－八一五三
電話　〇七五－三四三－〇〇三〇（編集）
〇七五－三四三－五六五六（営業）

装幀者　井上二三夫
印刷　立生株式会社　製本　新日本製本株式会社

©M. Komazawa 2010 *Printed in Japan*
ISBN 978-4-8318-2454-7 C0015
乱丁・落丁の場合はお取り替え致します

9784831824547

1920015018007

ISBN978-4-8318-2454-7
C0015　¥1800E

定価：本体1,800円(税別)

❖目次

一章　何のために生きるのか
二章　生きている、輪廻転生するとはどういうことか
三章　誤解している『葉っぱのフレディ』
四章　阿弥陀仏とは何か
五章　迷っている衆生
六章　信を得る
七章　現生正定聚――煩悩熾盛の身のまま救われている――
八章　信は他力
九章　人生は信を得るためにある